

平成25年度運営諮問会議 開催要領

1. 日 時 平成25年12月2日（月）10時00分～12時00分

2. 会 場 宇部工業高等専門学校 大会議室（管理棟3階）

3. 出席者

○運営諮問会議委員（五十音順）

金 重 和 義 委員	久保田 后 子 委員
久保田 隆 昌 委員	小 泉 良 委員（山田委員の代理）
品 川 博 委員	千 葉 泰 久 委員
津 田 賛 平 委員	津 守 一 郎 委員
堀 憲 次 委員	向 井 隆 男 委員
村 田 茂 輝 委員	

○宇部工業高等専門学校教職員

福 政 修 校長	杉 本 信 行 副校長
小 倉 薫 校長補佐（教務主事）	岩 元 修 一 校長補佐（学生主事）
武 藤 義 彦 校長補佐（寮務主事）	藤 田 活 秀 専攻科長（兼国際交流室長）
高 橋 正 和 図書館長	福 地 賢 治 技術室長
吉 田 政 司 機械工学科長	橋 本 基 電気工学科長
三 宅 常 時 制御情報工学科長	山 崎 博 人 物質工学科長
内 田 保 雄 経営情報学科長	薄 井 信 治 一般科（文系）科長
中 村 貢 治 一般科（理系）科長	内 堀 晃 彦 キャリア支援室長
浅 原 京 子 学生相談室長	
中 村 嘉 雄 英語科准教授	後 川 知 美 英語科准教授
前 川 幸 枝 校長補佐（事務部長）	黒 田伊久男 総務課長
廣 兼 敦 学生課長	
（陪席） 総務課副課長、学生課副課長、企画連携事務室副室長、総務係員	

4. 日 程

10時00分 開 会
校長挨拶
出席者紹介
資料の確認

議 事

一、議長選出

二、議長挨拶

三、議題

- 10時10分 1. 宇部高専の活動状況について 【資料1-1~2】
(第2期中期目標・中期計画の暫定評価について)
(質疑)
2. 宇部高専の今後の展開について 【資料2-1~3】
- ①高度化への対応について
 - ②志願者確保について
 - ③英語教育について
- (質疑)
- 11時55分 議長挨拶
校長挨拶
- 12時00分 閉 会

5. 配付資料

○平成25年度運営諮問会議 出席委員名簿

○運営諮問会議 座席表

○運営諮問会議規則

○議事資料

議題1：資料1-1 「第2期中期目標・中期計画に係わる自己点検・暫定評価書要約版」

資料1-2 「第2期中期目標・中期計画の概要」

議題2：資料2-1 「宇部高専の高度化への対応」

資料2-2 「志願者確保のための取り組みについて」

資料2-3 「宇部高専における英語教育」

○参考資料

- ・宇部工業高等専門学校 中期目標
- ・宇部工業高等専門学校 中期計画
- ・平成25年度宇部工業高等専門学校の動き
- ・平成25年度 学校要覧
- ・学校案内 2014

議 事

(1) 開会

総務課長の進行により、運営諮問会議が開会された。

(2) 校長挨拶

日頃より宇部高専の運営につきましていろいろご支援頂きましてありがとうございます。また、本日はお忙しい中をお集まり頂きましてありがとうございます。

高専機構は昨年、宇部高専を含めて12校が50周年を迎え、今年が12校、来年度12校が50周年を迎えることとなります。

高専機構は、独立行政法人化されてから5年ごとの中期計画で動いておりまして、今年度が2期目の中期計画期間が終わる年であります。来年度に向けて第3期の中期計画・中期目標を作ろうということで、いろいろ議論が進んでいるところでございます。そういう訳で、本年度が2期目の5年の最後ということで、宇部高専のこれまでの5年間の動き、概要をご説明させて頂いて、ご意見を頂き、それを3期目の目標へ盛り込んでいきたいと思っております。それから、本校の高度化に向けて、昨年の運営諮問会議でもいろいろご質問が出た中で、宇部高専の学生確保ということで入試をどのように取り組んでいるのかという点と、宇部高専における英語教育はどういう考え方で行っているのかというこの2つは3期目に向けても非常に重要な問題になっておりますので、そのことについて宇部高専の考え方を話しさせて頂いて、委員の皆様からのご意見を頂き、それを3期目へ反映させていきたいと考えております。

委員の皆様のご意見をしっかり我々受け止めたいと思っておりますので、お気づきの点をいろいろご指摘頂きたいと思っております。よろしく申し上げます。

(3) 出席者紹介、資料の確認

総務課長から、本日出席の運営諮問会議委員と本校教職員が紹介された。

引き続き、配付資料の確認が行われた。

(4) 議長選出

総務課長の進行により、本会議の議長として堀委員が選出された。

(5) 議長挨拶

山口大学工学部長の堀でございます。議長をさせていただきます。それでは、お手元の運営諮問会議開催要項に基づき、議事を進めさせていただきます。

この会議の職務は、運営諮問会議規則によりまして「宇部高専の教育研究活動や運営に関する重要事項を審議し、校長に対して助言を行う」こととなっております。各委員におかれましては、宇部高専に対しての助言、ご意見等をご自由にお聞かせ願いたいと思っております。

本会議の進行形式としましては、始めに宇部高専側から議題に対して説明していただき、その後、意見交換をお願いいたします。

(6) 議事

(議長)

それでは早速議事に入りたいと思います。

まず、第1、宇部高専の活動状況について、杉本先生よろしく申し上げます。

(杉本副校長)

私のほうから御報告させていただきます。

お手元の資料の1の1、1の2、この2つを使いたいと思います。資料1の2をご覧ください。第2期の中期目標・中期計画の概要・骨子からご説明いたします。

宇部高専の中期目標・中期計画、大見出しといたしまして、1番目、教育に関する事項、2番目、研究に関する事項、3番目、社会との連携、国際交流に関する事項、4番目、管理運営に関する事項、5番目、業務運営の効率化に関する事項、6番目、その他となっております。

大見出しに対しまして、必要に応じて、小見出し、例えば、1番の教育に関する事項に関しましては、(1) 入学者の確保、(2) 教育課程の編成、(3) 優れた教員の確保、(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム、(5) 学生支援、生活支援、(6) 教育環境の整備・活用、こういった小見出しをつけております。1番の教育に関する事項に関しては、具体的な計画項目といえますか、観点が入学者の確保3項目から6番の教育環境の整備・活用まで6項目、計40項目ございます。

同じように、2番の研究に関する事項については7項目、3番の社会連携に関しては10項目、4番目の管理運営は5項目、5番目の業務運営は6項目、その他5項目と計73項目の計画がございます。この73項目に対して、S、A、B、Cという4段階による自己評価を平成24年度末時点で行いました。平成25年度が第2期の最終年度ということで、最終年度を迎えるにあたり前もって、自己評価をして、ウイークポイントを洗い出す目的で行った訳でございます。その結果、S評価、「特に優れた実績を上げている」は2項目、それからA評価、「中期計画が年度計画どおりに実施できている」は64項目、これが大半でございますけれども、それからB評価、「中期計画がおおむね達成できている」、ウイークポイントがあるけれどもおおむね達成できているというのは7項目、C評価の「実施できていない」というのはゼロ項目という状況になりました。

このS、A、B、Cの具体的な評価を示したのが資料1の1ということでございます。

きょうは時間の関係上、この中の特に優れている項目、2項目、おおむね達成できているが少しウイークポイントあるよという7項目について、ご説明させていただこうと思います。

資料1の1に移ります。この黄色い枠が大見出しですね。それからブルーの枠、これが小見出しということになりまして、白枠が計画の項目というふうになっております。1番左側の列にその項目の番号を1番から73番まで付けております。

この項目番号で言いますと、4番、「教育に関する事項」の(2)「教育課程の編成」で、「産業構造の変化、技術の高度化・複合化等による社会、志願者のニーズの多様化を踏まえて、学科構成や専攻

科のあり方等を不断に検討する。」という項目、一応おおむね達成はしているのですが、実際に機械・電気・制御という3学科に対しては、1学科に大括り化して入試をしたらどうかという案をつくり、これまで運営委員会等に諮ってきましたが、なかなか成案には至っておりません。引き続き検討が必要かと思えます。本日の次の議題にもございますが、これはちょっと積み残しということになっております。

それから同じように、項目番号10番、ここは特に女性教員の男女共同参画を推進し女性教員の採用を積極的にしようということで、Bという判定をしております。本校は約80名の教員がいる中で、今、女性教員が7名で、まだまだ割合からすれば少ないということで、新規の募集に関しては女性限定の公募を行っております。専門によっては、応募者が少ないという現状がございますが、今後、鋭意取り組む必要があると思えます。

それから15番、この項目は基礎学力を習得させるという内容になっております。これは我々教育機関に働く者として永遠の課題になろうかと思えますが、全国の高専で一斉に学習到達度試験を行っていますが、その結果を見ると、必ずしも本校は余り良くはないという、そういう自己評価をしております。統一試験というものに対して、過敏に反応する必要はないのかもしれませんが、私どもの反省材料にはなり得ると思えますので、問題があるのではないかと考えております。

それから16番の国際社会におけるコミュニケーションという英語力。これも企業さん等のほうから、いろいろご指摘がございまして、「高専卒業生、英語弱いよ」ということ。これも本日の議題、2番目の議題に上げておりますので、そちらのほうで報告させていただこうと思えます。

それから、17番目のeラーニング等の活用による学生の自学自習体制をつくっていくということ。これまでずっと取り組んできましたが、非常にeラーニングのコンテンツといえますか、用意・準備している状況が非常に少のうございまして、今年度から、このeラーニングシステムを管理運営するアプリケーションであるWebclassを導入し、使い勝手などの講習会等を開催し、eラーニングのコンテンツの増加に取り組んでおります。

それから、20番目、学生による授業アンケートの活用ということですが、これはこれまで本校、個々の教員の教育改善に役立てようと思って行ってきましたが、もう少し組織的にこのアンケートを活用するということを図っていく必要があろうかということで、教務の方で取り組んでいるところでございます。

それから24番目、教育水準についての自己点検ということでございますけれども、PDCAサイクルをどんどん回していく必要があろうかと思えますけれども、これまで十分なサイクルがなされていたとは言いがたいということで、例えば、この中期目標・計画に対しては、毎年の自己評価といえますか、A、B、C評価をつけるのは大変なエネルギーが必要かと思えますが、少なくとも2年1回程度は自己評価をし、そしてウイークポイントをさらけ出して、それに対する対応をしていく必要があろうかと思えます。

以上、7項目がおおむね達成はしているけれども、最後の年、ちょっとラストスパートをかけましょうということをご説明させていただきました。

それに対して、2項目ほど、優れた点としてご紹介させていただこうと思えます。

同じ2ページの26番目の項目、これは学生支援関係でございますけれども、学生相談室を設けておりまして、カウンセラーを常時配備して対応していますが、臨床心理士2名、ソーシャルワーカー1名、そして本校の教員OB1名、計4名で、いろんな学生の相談、カウンセリングに対応しております。この対応体制というのは、近隣の高専の学校の中では多いといいますか、体制を整えているということで、優れた評価であるということにしております。

それから、最後の4ページ、69番の項目。これは自己収入の増加に関する事項ということで、教員の研究にも関連しますが、科学研究費等の補助金の獲得は全国の高専の中で上位に食い込んでいるということで、S評価、優れている項目であるということで評価しております。

以上、簡単ではございますけれども、73項目の計画に対しまして、ウイークポイント7項目、優れた項目2項目についてご紹介させていただきました。

以上でございます。

(議長)

どうもありがとうございました。

それでは、ただいまの説明に対しましてご意見、ご質問等ございましたら、よろしくお願いいいたします。

(千葉委員)

中期計画の評価について少し納得いかないのが、Cがゼロ。Sの2項目はわかるんですが、AとBでは、実績がある。実施できてないのがゼロ。結局、ベンチマークがどこにあるかということ。例えば、TOEICであれば、何人、何点以上、何人つけるとか、何らかのベンチマークできるものについては、定量的なベンチマークをつけて、それがここまでできた。何となしに、そういうことは難しい項目なのかもわからない。それは理解できるのですが、担当者とか、別にもう少し目標を分けて、担当者がどこまでできたか。逆にできてないというものがゼロということは目標が少ないというか、目標がまあまあのところにしてあるということがあるのではないかと。もう少しチャレンジするという姿勢でやる部署が必要ではないだろうかと思えます。全部じゃないですよ。というのは、私は現役のころ、開発研究関係を持っていて、役員が社長と年間目標を立てて3項目握るわけです。そうすると、開発研究を持っていると、軌道に乗るとみんな事業部が持つて行くから、残るのはうまくいかないものが7つも8つもある。それをちゃんと全部いくようにしたら、A、B、CのうちBがつくんですね。1個でもできなかつたら、C。結局、普通はBですからCになるんです。それとか、2つ目の目標は三、四年先に結果が出てくるものなんですね。ですから、今度はBがつき、ついてもB。それから、もう1つは、7年とか、10年先を見て物を作っていくようなものが3つ目の目標である訳で、そうすると、できましたというようなことができないから、私はいつもCでした。だけど、それにチャレンジするようなことをやる部署というか、そういったものはないと、ざあっと見ると、AとBと、大体そんなもんですね。S、A、Bがちょっとありますよと。だから、この後、自分たちが何をどうすればいいかということをもう少し明確にしたら、いかがなものだろうかと思えます。

(杉本副校長)

ご指摘ごもっともだと思います。評価をするということは、かなりエネルギーが必要ですが、

例えば、資料1の1の1番の項目がアドミッション・ポリシーの「選抜できる多様な形態の入試を実施し、優秀な学生を受け入れる」という計画に対して、受け入れてはいるわけですね。実際に、では、今の状態でまずいのかと言われると、なかなか悪いという根拠もなければ、逆にまたこれで満足をしているという根拠もなかなか言いにくい。非常にご指摘はごもっともだと思いますので、少し、そのあたりの評価の基準といえますか、これは第3期中期計画を立てるに当たって、少し色合いを濃くしていく必要があると感じております。ご指摘ありがとうございます。

(千葉委員)

例えば、この分野によってと申したのは、例えば、項目が上がったら、もう50点と。研究開発だったら、こんなところでどうかなと。テーマを考えたら。それから、取りかかったらもう60点だとか、70点とか、それから後、結果がどう出るかとか、その種類によって、いろいろ違うと思います。だから、教務主事の担当はたくさんあると思いますけど、それは目標立てただけでも5割以上の達成度とか。そういうことになる。何かそういうある程度ぼんやりしたものでいいと思うんですけど。だから、ここに担当部署というのがありますよね。例えば、担当部署を横に書いて、主として、例えば、教務主事が担当で2重丸と。こんな多い項目を全体としてぼんやりと共有してしまうより、自分が何をすべきかを分けてみてはどうかと思います。

(津田委員)

結果も私は大事だろうと思うのですが、むしろ、私は、どちらかという、何の項目をここに上げていって、そして上げた項目をいかにして、それを達成していこうかという努力が必要なのでは。なかなか難しいけれども、これはぜひやっていかなきゃいけないというような項目がある場合、これは将来やろうとしてもなかなか難しいので、結論にすると、Cになるかもしれないので、ああいうのやめてしまおうということでは、逆に、それはマイナスではないかなというふうに思います。むしろ、結果がA、B、Cということよりも、むしろ、どうあるべきか、何をなすべきかという項目をむしろ選定し、そしてチャレンジしていくということのほうがむしろ大事ではないかと思うのですが。結果はA、B、Cもあるかもしれませんが、むしろ、それをどういう項目をここに入れていくのか、どうあるべきなのかということの項目の選定をむしろ考えていただく。それでチャレンジしていただくということのほうが、私は大事ではないかと思います。

(福政校長)

言われていることはごもっともで、ここに上げている項目は、項目を上げて、何かそれにこちらが取り組んで、何かやっただけで、もうBになっているというような、そういう非常に少し甘いところがあると思います。一番大きなことは、志願者確保というところで、幸いにして、今のところ、定員割れとか、そういうことは起こってないのですが、志願倍率2倍ということで51高専が動くのであれば、宇部高専も残念ながら、トータルで志願倍率2倍ということについて、この5年間でできていません。だから、そういうところを数値目標に上げると達成できてないということになるので、そのあたりの評価の基準というのを定量的になかなか出しづらい、あるいは、出すと難しいと思うところもあります。中期計画が3期目にも入ってくると、どういう項目をどのように考えて、リストアップしていくのかという、そういうことも含めて今後の計画をつくる際には、考え方を教職員が共有していかなければい

けないと思っております。

(議長)

やっぱり数値目標がないというのはよくないだろうということ。我々も身上書を出して、それには必ず数値目標を書かされます。TOEICの点数何点以上が何割とか必ず書かされていますし、外国に所属したのが何人、修士でいたのが何人、そういうふうな書かれ方をします。ですから、その数値をクリアした上で、A、B、Cっていうことになるのですね。評価されるときにですね。だから、その数値がいいのではないかというような気がします。

先ほどの倍率でいけば、2倍ではなくて、合格最低点のほうだろうと思います。国立大学、うちの工学部の場合、入試の科目が少ないこともありまして、大体3倍近いですね。ところが合格者出しても来る割合が非常に少なく、結果的には2倍ぐらいになってしまっているような状況があります。ですから、やっぱり、我々が見ているのは、倍率ではなくて最低合格点ですね。他大学の工学部に聞いてみると、ほとんど逃げないと。ですから、2倍を切っても何の問題もないというふうなことを聞いたことがございます。その辺はですね、高専機構が2倍という数字にこだわるのではなくて、やっぱり最低点にこだわったほうがいだろうというふうに思います。

それともう1つ、コミュニケーションのことですけれども、これもeラーニングコンテンツの絶対数が少ないとかですね。これも、何個だったら多いのかということがあると思います。ですから、それは恐らく書いておく必要があるのだろうという気はします。英語の場合でいきますと、お金はかかるのですけれども、自作するよりも、例えば、幾つか会社がありますよね、ああいう所を使うようにしたほうが、もちろん教員の選択があるのですが、教員の皆さんがどれがいいとか、どれが悪いとか考えた上で選択するということもある。お金もかかることなのですが、そうしたほうが比較的良いものが使えるという気がします。

もう1つ、PDCAについて、JABEEなんかは特に毎年委員会開いて、必ず何をしたとかをチェック項目がありますよね。だから、それを開いておけばBということにはならないと思うのですが。

それについてはいかがですか。

(小倉教務主事)

教育点検・評価委員会というところで、前年度の活動を総括するというようなことをやっております。

(議長)

僕が聞いているのは、それだけではなくて、今年はこのところは不十分であったので、来年はこうしようとか、必ず議事録に残した上でやるのだというふうに、機械工学科からは聞いているのですが、そういうのもしっかりやっておられるのですけどね。

(小倉教務主事)

前年度の活動を総括して不十分なところを上委員会に答申をして、ここが不十分であると、だから改善してほしいというようなことはやっております。

(議長)

それに対する回答が次の年にある筈ですよね。ここが不十分だったので、こう改良したとかですね、そういう報告が上がってないということなのですよね。このBというのは、

(杉本副校長)

個々の委員会におけるPDCAというのは、ありうるのかもしれませんが、ただ、自己点検をするという委員会はあるのですけれども、自省の念を込めて少し形骸化した傾向があるのではないかと。実は前回の運営諮問会議、山田委員のほうからも少しPDCA弱いんじゃないかというご指摘がありましたので、それを受けて、Bという判定をさせていただきました。この中期目標・中期計画に勘案する評価ということも、毎年している訳じゃなく、今回初めてしたようなことをごさいますて、もう少し頻繁に自己評価というのは、客観的にしておく必要があると思います。

(議長)

大学は必ず毎年達成度を書かされます。中期計画・中期目標に関して高専はそうではないのですね。

(杉本副校長)

一応、本部には報告するようになっています。

(議長)

本部が文科省に報告するのですね。

(杉本副校長)

そうですね。

(久保田(后)委員)

数値目標についても、今、委員の皆さんがおっしゃったとおりで、市役所におきまして、私どもの計画におきまして、毎年ですね、数値目標入れて、毎年PDCAを回し、検証するというようなことをやっています。教育・研究機関ということでもありますので、一概にそのとおりにはいきませんが、少なくとも、組織の管理運営、企業においても、自治体においても、この研究機関においても、こういった業務運営、光熱水費、こういった分野については、より一層の数値目標を掲げられて、コストの節減を図られることが、研究費や教育費への投入という好循環をもたらすことができると思いますので、こういったところへ、より一層の明確化ができればとそうように思っております。

その中でお尋ねをしたい点がございます。Sですね。特に優れた実績を上げているという点で2項目出していらっしゃるわけですが、この26番の4人体制ですね、こういう相談等が4人体制で他校と比べたら多いということで、この体制と課題を解決することにつながっているのか。たくさん確かに配置をすることがいいと思いますが、効果的であるのかどうか。それから、もう1つの69番、「申請数の増加と採択率の向上を目指す」ということですが、実際にそれにつながっているのか。それらが示されて、Sということになっているのかどうか、お尋ねをいたします。

(杉本副校長)

1つ目のご質問26番の学生相談室の体制ということですが、相談した結果に対して、どういう効果があるのかというのが、なかなか把握しづらいというか、しにくいといえますか、お答えしにくいのですが、相談室長何かコメントございますか。

(浅原学生相談室長)

相談室のカウンセラーは、平成21年度、22年度まで1名の体制で行ってまいりました。それで週に1回だけでした。そのときは予約が1カ月待ち、2カ月待ちの状況でした。それを23年度から年度の

途中で少しずつ人員を増やし始めまして、そして23年度の後期から4名体制が確立してきました。そうしますと相談の件数も徐々に増えていきまして、例えば、平成22年度140件だったのが、24年度には全部で302件と、やはり相談もすごく増えていまして、一番よい点が、カウンセラーを増やした理由が、主に、平成23年度と24年度に中国地区の8高専で障害学生、特に発達障害の学生に対して支援を行うというプロジェクトを行いました。そのときに、主に発達障害の学生を視野に入れてカウンセラーの充実を行っていたのですが、発達障害の学生以外の学生もたくさん相談室を訪れるようになりまして、それがまず一番よかったことですね。それから、カウンセラーの先生が常駐していらっしゃることで、担当している教職員も抱えている学生のことについて相談に行けるようになりまして、これもすごく効果があったと思います。数値で表すことはすごく難しいですけども、相談件数の増加などを考えても、少しずつ効果が出ているのではないかと考えています。

それから、プロジェクトのときに予算がありましたので、設備面でもいろいろと整えていきまして、目に見える効果というものは難しいのですけれども、相談体制を今後も充実していきたいと思っています。

以上です。

(杉本副校長)

今の回答でよろしいでしょうか。

(久保田(后)委員)

はい。そういうことは、是非ですね、こちらに記載をされたら。私ども市役所もたくさん相談機能を持って、やっぱり対前年度より相談件数増えることは非常にいいことですね。シリアス件数が減ったとかですね。そういうことで、プライバシーに関わらないところでの評価指標というのも確立されていますので、そういったことを記載されてみたら、もっと地盤ができる優れた成果だというふうに言えると思います。

ありがとうございました。

(杉本副校長)

ありがとうございます。

2つ目の件、外部資金といいますか、科研費申請件数・額が多い。これが教育にどう反映しているかというご質問だろうと思いますけれども、私どもの学生教育に対しては、企業さんのニーズをどう取り組んで教育に反映するかという観点で数値的にあらわしているものの中の一つといたしまして、学生の卒業研究のテーマに企業のニーズをどれぐらいの割合で取り組んでいるかということを毎年調査しております。学科によって差はありますけれど、2割か、3割ぐらいでしょうか、ホームページに上げていると思いますけれども、そういった形で実際の企業さんが抱えている課題を学生の教育に取り組んでいるという指標がございます。それと補助金がどう直接結びつくかというのはなかなか難しいことかもわかりませんが。

(校長)

外部資金にもいろいろありまして、ここで言っている科学研究費、これは先生方が自由に研究テーマを決めて申請を行い、外部資金が入れば間接経費がつくので、教育・研究の環境整備に充てることがで

きます。宇部高専は、今年度で言いますと、科研費の採択件数は25件ということで、51高専の中の5番以内に入っています。それから学内では校長裁量経費に、その間接経費の一部も使うような形で、先生方の教育・研究についての分野に、学内での申請も促すようにしています。そして研究のみならず、教育の方へも反映するようなテーマも取り上げるようなそういう形で進めておりますので、申請件数は毎年宇部高専80名いる中で、大体50名から60名ぐらいで推移しており、このあたりをもっと広げられるようにしていきたい。そういうふうを考えております。

(品川委員)

1ページの評価書を見ると、細かいところはよくわかりませんが、1ページの(4)ですね。「教育の質の向上及び改善のためのシステム」という中括りの項目の評価が、ほかの評価の中括りを見たときに非常に低いですね。Bが非常に多い。これは教育の質の向上及び改善のためのシステムに対する取り組みだとか、取り組まれる方々の認識というのが少し弱いのではないかというような気がします。細かいことはわかりませんが、その辺の取り組みを次の年度においては、どうして(4)の部分の自己評価が低いのかということを考えられたらいいと思います。

(校長)

ありがとうございます。それにつきましては、2番目の項目のほうで、少しそれも含めて議論していただけることになろうかと思えます。このところにつきましては、コミュニケーションだとか、いろいろ上がっていることについて、宇部高専で取り組んでいる内容を説明させていただいて、改めてご意見伺いたいと思っております。

(議長)

ちょうど、今、校長もおっしゃったことに、次の議題に主にそういうところがございますので、次の議題に移りたいと思えます。

2番目、「宇部高専の今後の取り組みについて」ということで、福政先生、小倉先生、英語科の中村先生、順によろしく申し上げます。

(校長)

この2番目の議題で、これからの宇部高専の教育とか、在り方について、ご意見をいただきたいと思っております。

それで、一番大きな志願者確保と、グローバル化ということに対応した英語教育という2点について、個別に話題提供させていただきますけど、宇部高専の高度化への対応ということで、私のほうから説明させていただきます。

宇部高専も含めて、高専は50年たったということで、高専のミッションをどのように考えるかということになってきております。これまでの経緯を見ていると、高専は技術者そのものを育成するということより、最近の傾向は、将来、広く理系分野で活躍できる人材の卵を生み出すような役割を担っているのではないかと考えております。それは卒業生の進路が卒業すれば全て就職という形で技術者になっていくのではなく、4割近くが進学という形で専攻科に進学する、あるいは大学へ編入していくというような、そういうことになっておりまして、宇部高専でも、いろんな資料で、大体3割強、4割弱が進学、それから6割強が就職というようなことになっております。高専機構、高専全体として、これ

からの人材育成は、グローバル化への対応ということと、それからイノベーション指向の人材育成ということで、大学での人材育成と同じような、社会の要求に応えるような人材を送り出すことであると。そして出口のところの学力レベルをキープするために、モデルコアカリキュラムというものを設定して、学生の到達度をしっかりと把握して世の中に送り出すというような、そういう形に持っていこうということで、数年来議論が続いております。平成27年度にはモデルコアカリキュラムを中心にした教育システムに移っていこうということを受けまして、宇部高専においても、本科、専攻科の高度化、それから、モデルコアカリキュラムを導入するための準備を進めております。

この表は、宇部高専の中に「高度化に関する検討専門委員会」を設けて、新たに導入教育ということを含めて今後やっていかなければいけない。それから本科、専攻科では、それぞれカリキュラムの見直し、そしてモデルコアカリキュラムの導入に向けた検討をやりつつ、入ってくる入学者の多様化に向けて、改めて導入教育、キャリア教育をより徹底させるということを含めて考えなければいけないということで、このようなワーキングを設置して、具体化について検討していこうと思っております。そして、専攻科あるいは本科での英語教育の改善とか、少子化に向けての志願者確保するために学科構成をどういうふうにするのかということも視野に入っていこうかと思っております。特に導入教育で問題にしたいのは、各学科の教育の見直しと同時に、高専教育にうまくマッチングできるような、そういうことを意識した教育を主体にするということで、これは学科に関係なく、宇部高専に入ってくる学生に対して、キャリア意識、それからレポート書きに始まって、高専での実験実習を主体にした5年一貫教育の流れを学生に、特に低学年、1年、2年、3年の間に学科の教育と並行して、絶えずインプットしていく。そして学科での専門教育がスムーズに入っていけるような、そういう環境づくりを意識した新しい導入教育を考えております。同時に各学科でのカリキュラムの検討、内容の高度化を行っていくために、宇部高専はこのような形で検討を進めていこうと考えております。

(議長)

それでは続きまして、小倉先生のほうから、よろしく申し上げます。

(小倉教務主事)

お手元の資料の2の2でございます。本校はご存じのように5学科から構成されておまして、各学科募集人員は40名ですので、5学科ということで、毎年200名の学生を集める必要がございます。この200名の学生を集めるために、2枚目のスライドですけれども毎年入試関係広報行事としては、オープンキャンパス。このオープンキャンパスは8月と11月の2回実施しております。そして、小学校への出前授業とか、あるいは小中学生向けの公開講座のようなものを実施しております。また、中学校主催の進学説明会へ参加しております。今年は36校の説明会に参加したということがありました。さらに、学生にお願いし、夏休みに母校を訪問してもらっております。母校を訪問し、元気で活躍している様子、あるいは進路の様子などについて母校の先生方へ報告してもらおうことで、志願者を確保するための活動を行っております。

この表は今年度の入試の状況でございます。各学科40名の募集に対して、推薦、学力に対する志願者数が記載されております。

この志願者総数361名という数と志願倍率1.8倍、この361名と1.8倍というのを少し記憶

にとどめておいていただきたいと思います。

この表は、県内の市町村別の志願人数となっております。宇部市からは199名の志願者がございました。志願総数は361名でしたから、宇部市内の志願者が過半数を占めているという状況でございます。この宇部市内の中学校の卒業人口というのは、これから先、減少していくことが予想されております。このために、1.8倍という志願倍率を今後維持する、あるいは2倍という目標である志願倍率を達成していくことは、大票田である宇部市の中学卒業人口が減っていく以上は、これまでどおりの活動を行っていたのでは困難であるということが言えようかと思えます。中卒人口に対して、12%強が本校を志願していることとなります。宇部市に次いで本校志願者数が多かった山口市や下関市では2%前後の志願者数、志願率となっております。このような比較的人口が多いけれども本校志願率が低い地域、具体的には山口市、下関市、防府市に、ほぼ、今年は志願者がゼロであった岩国市を加えた県内の中学校卒業人口が多い地域を選びまして、徳山高専と合同で学校説明会を今年初めて開催いたしました。中学校の夏休みで行事がない時期を選びまして開催しましたが、ここに書いてある日時、参加者数ですけれども、この参加者数というのは保護者を含めた数でございまして、中学生の数で言いますと、およそこの半数程度です。当初、中学生が五、六十名集まってほしいということで始めたのですが、その目標値にはとても到達していないというような状況でございました。

今年は、学生に夏休みをお願いしている母校訪問について少し工夫をしてみました。昨年までは、各クラスの担任に四、五名程度の学生を任意に人選してもらいまして、100名強の学生が夏休みの思いの時期に母校を訪問しておりました。この問題点としては、進路の説明をするに当たって、5年生以外の学生が訪問しても、なかなか進路の説明ができないということがございます。また、中学校の先生は結構異動があるらしくて、高学年にもなると、なかなか知っている先生がおられず、低学年でないと親しくお話をできる先生が中学校の側におられないという問題点がございました。こういう問題点を改善するために、今年度は下関、山口、防府及び山陽小野田地区を選びまして、出身中学校ごとに学年の異なる数名の訪問団を人選しまして、母校を訪問してもらいました。この改善点としては、進路の話ができる5年生と中学校の先生を知っている低学年が共存した一体のチームとして訪問してもらうということで、中学校の先生と話がしやすい低学年と進路の話ができる5年生が一つのチームとなって訪問することによりメリットがあるということで、このようなことを行いました。

今後の課題ですけれども、これからどんどん少子化が進行してまいります。進行する少子化に耐え得る入試方法というものを今後、工夫していく必要がございます。

徳山高専と合同で実施した学校説明会では集客力アップを図る必要がございます。これまでは事前のPRが不足していたというふうに考えております。例えば、事前のPRとして、中学校で主催される進学説明会で告知をしたりするといったようなことも考えております。集客力はアップしても、本校を受験してもらわなければならないですから、来場者の本校受験率アップも図っていく必要があろうかと考えています。そのためには本校に興味を持ってもらう催しの実施ということが考えられると思えます。学生の母校訪問に関しては、中学校ごとに学年の異なる母校訪問団を結成するというを継続して実施していこうと考えておりますが、今年度は昨年度までに比べて、学生の参加率が少し低下してしまいました。これは、事前の説明が十分でなく、学生同士の連絡がつかなかったというようなことがありま

した。これからは、学生に十分な説明をした上で、学生同士で連絡をとってもらい、訪問してもらうことを考えております。

これだけで進行する少子化に耐え得る入試方法になるかどうかわかりません。是非、委員の先生方のご意見をお伺いしたいと思います。

以上です。

(議長)

どうもありがとうございました。ご意見は最後までとめてということで、次に中村先生よろしくお願ひします。

(英語科・中村主任)

お手元の資料の2の3になります宇部高専の英語教育ということで、一般科の英語科主任の中村がご説明させていただきたいと思ひます。

1枚目の下のほうの目標のところをご覧ください。本校では「国際化に対応できる技術者として必要となる基礎的な英語運用能力を育成する」ということを目標に掲げまして、語彙、文法の基礎力の定着と4技能と言われます基本的な英語運用能力の育成を中心に指導を行っております。しかし、英語というものは一朝一夕に身につくものではありませんので、やはり、学生には、どっしりと英語学習に取り組んでもらう、そういう姿勢が必要となります。では、どうすればいいかということで、宇部高専では、「日ごろの授業での動機づけ」、それとともに、「実力を図ったり、実践する機会を提供したりして、学生の自学意欲を高める工夫」、このような2段階で教育を行っております。

以下、この2点につきまして、簡単に説明させていただきたいと思ひます。資料のほうをご覧ください。

まず、1番最初に宇部高専における1年生から専攻科2年生までの英語の授業内容について、説明させていただきます。

ご覧頂いておわかりだと思ひますけれども、基本的には各学年で、Lのリスニング、Rのリーディング、Wのライティング、Sのスピーキングといった全般的な英語運用能力の基礎を指導しております。ただ、各学年で英語の授業数に多少ばらつきがありまして、1、2年生は比較的に英語の授業が多いのですが、3年生からは専攻科、各学科の専門の授業が増えていくことがありまして、英語の授業の数が次第に少なくなっていることがおわかりいただけると思ひます。そこで重要になってくるのが家庭での自学という点です。では、自学をどう促せばいいのか。自ら進んで英語学習するという、英語の学習力が欠かせなくなります。その学習意欲を育成するための具体的な方法といひますが、これからお話しする2点目の英語に触れるさまざまな機会を学生に提供することになります。

各学年でTOEIC I Pなどの外部試験などを活用しながら、学習意欲の向上に努めていきます。今年度の成果ですけれども、1年次の課題テストとして、新たにG-TECという試験を導入いたしました。従来3年次からリスニングレベルの高いTOEIC I Pの試験が始まって、学生から、そのレベルの高さに戸惑うというような意見が寄せられていました。そこで低学年のうちからリスニングの重要性というのを早く理解してもらって、3年次へのTOEIC受験、そういったものへの学習がスムーズに行えるようにと、従来のリーディングだけの試験を廃止して、リスニングとライディングの試験を

兼ね備えたG-TECを採用しました。このG-TECでは付属の問題集もありますので、それをいかに活用して、3年次へのステップアップをよりスムーズなものにしていくかが来年度の課題の一つです。

もちろん、これだけではありません。英語弁論大会、英語プレコン、これはプレゼンテーションコンテストの略です。それと英検などを1年生から5年生全員に奨め、指導を行い、TOEIC I Pも、合計5回本校で実施しております。そして、更に、TOEIC I Pに関しては、学外から講師をお呼びし、夏休みに特に勉強してほしいということでTOEICの特別講座を実施しております。これには毎回100人ぐらいの学生が来ておりまして、2日間みっちり勉強します。学生の出口では、海外での語学研修、海外のインターシップの指導、大学・大学院編入時の個別指導、そういうところを通して、学生ができるだけ主体的に英語学習に励むことができるように日頃から支援しております。

今後の展望ですけれども、更に学習意欲を高めるにはどうすればいいのかということで、1番目に、ハイ・スコアラーの育成による競争原理の導入。結構、学生というのは、いい点数をとった学生がいると、僕もという感じで、皆、楽しんで勉強します。そうした雰囲気を利用しながら、もっと意欲を高めて欲しいということと、2番目として、今も行っているのですが、表彰制度をもっと充実したものに、学生に見えるような形にして、みんな勉強している、そのような雰囲気を学校全体で育成したいできたらと思っております。

そして3番目のところは、今後恐らくグローバル化に対応できると思うのですが、来年度からTOEICのほうは、スピーキングとライティング試験が本格的に導入されます。本校におきましても、このスピーキング、ライティングを重視した試験を来年度から取り入れようと思っております。

今後、我々英語科の展望ですが、各学年で実施している外部試験やプレゼンテーションコンテストのような英語を使う機会を一層活用して、学生に英語学習意欲をさらに高めてもらい、各学年での英語学習がより効率的に、つまり発展的に取り組めていけるような授業のシステムをつくり上げていく。また、G-TEC、先ほど申しました課題をうまく利用するとともに、1年次から3年次の学生に関しては英語の共通の授業を実施することを、今、計画しているところです。

そして、もう1つが、基礎力の増強に加え、プレゼンテーションや会話などグローバル時代に対応した英語発信能力の強化を目指そうと。今までのリーディング、リスニングというのは、要は聞いて、字句で解するというインプットのところなのですが、それをどう使うか発信能力が問われると思います。先ほどの具体例として、低学年時の早い段階でのスピーキング力の強化、それと先ほど申しましたTOEIC SWを導入して、さらにその指導というものを強化していきたいと思っております。とはいえ、英語を身近に感じる環境整備というものが学生には一番よい刺激であります。どうぞ皆様方のご意見をお聞かせいただければと思います。

以上です。

(議長)

どうもありがとうございました。3人の先生の方からご説明いただきました。何でも結構です。

(議長)

一番最初の福政先生のモデルコアカリキュラムへの対応については、話は違う工学教育に関しては、

文科省が大体の骨子を示して、4年次までの内容ということで、進めてきた委員会があったことをご存じですか。

(校長)

それも意識しながら高専機構はやっていると思うのですが、出だしは、一応、コアカリキュラムについて、各高専で同じような学科名であっても、やっていることがまちまちであるものを、高専として統一基準のもとにカリキュラムを見直し、その内容をそれぞれの工学系も含めて7分野にわたって、盛り込むようにということです。それを採用する各高専は、これまでのカリキュラムに合わせてどうなっているのかをチェックするということと、学生自身が教科内容のみならず、自分の到達度がどのようになっているか**しっかりと**チェックすることで、卒業していく学生の質保証を図ろうと高専機構が中心になって動いています。

(議長)

どうもありがとうございました。全然違いますが、できたら質保証ということで山口大学と広島大学が数学統一試験をやっておりますので、それに宇部高専が参加してもらい、もし、しておられたら、増やす努力していただければ、こちらとしてもありがたいというふうに思います。

ほかに何かございませんでしょうか。

(向井委員)

黒石中学の向井と言います。

中学校の立場から、意見というわけではないですが、先ほど志願者確保のための取り組みということで、今後の生徒の数がかなり減ってきますので、確保が大変だろうと思います。公立高校の受験料は2,200円です。私立高校は1万3,000円ぐらいです。確か、宇部高専は1万6,500円だったでしょうか、保護者との話の中で高いという話を聞いたことありますが、これは宇部高専でどうにかなる問題ではないかもしれませんが、そういう声は聞くことがあります。

オープンキャンパスについては、3年生だけではなくて、1年生のほうも参加ということで、本校からも参加して、これはとてもいいというふうに感じました。

さらに、先ほど、1の1の資料の4と関係があるのですが、10年前の子供たちに比べて、今の子供たちを見ると、非常に幼児化といいますか、精神年齢が低くなったような感じがすごくあります。学校でキャリア教育について取り組んでいますが、中学校の卒業段階で、将来こんなふうになりたい、この道に進みたいという生徒がすごく少なくなったような気がします。5つの学科がありますが、中学校卒業時点ではっきり自分の将来を見据えた進路というか、科を選べるかという、すごく減っているような気がしますので、実業高校でも、今、括り募集を進めていますが、入った後、その後の人数の振り分けというのは、うまくいかない場合は大変だろうなというふうに思います。中学校15歳の時点で、将来に向けて、しっかりした課題を持っている生徒は随分減っていることへの対応が必要だというふうに、中学校側でも頑張る必要あると思いますが、高校、大学でもそういうことを考えなくてはいけないという感想を持っています。

以上です。

(校長)

ありがとうございます。漠然としたお答えになってしまうと思いますが、先ほど1番のほうで、学科編成について、機械、電気、制御を大括り化ということも視野に入れて議論したということを書いたけど、これは宇部高専の生産システム工学専攻は3学科が入っているコースなので、本科と専攻科の接続性を良くし高度化ということだったのですが、今、先生が言われたような志願者のニーズというときに、やはり宇部高専の今の5学科というのは比較的バランスがとれた内容ではあるのですが、本当にこういう内容でいいのか。大括り化のような形で入れておいて、何分野かのコースにするとか、そういうことをやはり一度、しっかりと入り口側の中学校にも、それから出口側については企業とか、そういうところへアンケートをとらないといけないだろうなと思っております。そういうことを含めて導入教育と言っておりますのは、一応、学科ごとに入ってくるのだけれど、学科の違いを知らなければいけないという意味と、違っていても物づくりに対してはいろんな分野が絡んでいるということを含めて、入ってからの学生に対しての動機づけを、選んだ学科で問題がないことを納得させることを含めた教育内容です。最終的には地域のニーズということ、女子学生の数を増やすというようなこと、そのようなことを含めながら、学科のあり方については、一度、地域の動向がどうかということ进行调查しなければいけないと思っております。

(村田委員)

セントラル硝子の村田と申します。先ほどから、高専の良さ、高専の特徴を考えながらお聞きしております、最後に英語教育の話をお聞きしまして、要するに5年間の一貫教育ができるという中に、英語の教育を取り込んでいच्छると。これは大変すばらしい。じゃあ、本来の専門のコース、英語教育と同じように、継続した5年間というメリットがありますので、どのように教育することを考えていच्छるか、お聞きしたいと思います。

(校長)

5学科ありますけども、5年間というときに、一般科目とそれから専門科目のくさび型ということで、5年間で大学卒業と同程度の知識を学生に教えるということ、そして、さらに強い専門性を身につけるために、専攻科(2年)が設置されています。5年間では実験、実習ということも含めて、1年のときから、ある程度学科の特徴を出しつつ、大体3年ぐらいから専門科目を出して、3年、4年、5年で、それぞれの各コースの専門知識を教えていくという、その方向で今後もしっかりと維持してやっていきたいと思っております。

(村田委員)

質問が抽象的過ぎましたけれども、今回、グローバル社会に変わっていくということで、英語教育をそのように対応されていくのか、今までの高専の5年間という一貫教育をこれからどのように変えていかれるつもりなのか、その辺を少しお聞きしたいのですが。

(校長)

わかりました。先ほどからいろいろご意見を伺っているのですが、入ってくる学生の意識が非常に多様化してきており、改めて各学科に入って、そこでずっと5年間をやっていけばいいということでは、対応しきれなくなっている面があって、それを導入教育というようなことで、高専教育をやる上でのバックグラウンドを全学科共通でやりつつ、専門学科の各コースの教育を意識して、この5年

間はやっていかなければいけないと思います。進学も増えてきているので、全てが卒業と同時に社会へ出て行って技術者になるというコースをとるわけではなくなってきましたので、高専のミッションが、これまでどおりというわけにはいなくなってきました。しかし、5年間でやはり実験、実習という実技のところをしっかりとやりつつ、それを理解するための理論というところで講義が入ってくる。その特徴は生かしながら今後もやっていきたいと思います。しかし、卒業する学生の出口が非常に広がってきているので、その対応も考えなければいけない。そういう意識で各学科において検討する。先ほど英語については、英語科で、講義、授業を主体に行うこと、外部のいろんな機関を使って、英語教育をどうするかということについて述べましたけれど、専門学科についても、卒研、あるいは専攻科の特別研究の発表に英語によるプレゼンを加えていく等今後の変化に対応したものに少しずつ変えていかなければいけないと思っております。

(千葉委員)

先日、キューブサロンで、講演いたしました。あのとき、高専の方が随分たくさん出席され、いろいろ模索されていることがよくわかりました。ですから、カリキュラムにどう入れるのかということ、いろいろ悩んでされているというのは企業側から見てもですね、苦勞されていることは十分わかります。

例えば、少し、実務をやっている人間、外の講師を入れられることは、ある範囲内で必要かと思いません。

それと、もう1つ、英語教育について、失礼な言い方になるかも知れませんが、先生は読む、書くはできるが、聞くとしゃべるがきちんと全員できますか。努力されているかどうか。私の経験では、国際会議などでわかりますが、自分で発表したことは用意しているからできるのですね。一番困ったのは、しゃべったものについてパネルディスカッションで、200人ぐらいいる中で、パネリストの相手をする、これがなかなか厳しいものがありました。そういうことがあると、しっかり英語を身につけなければいけないし、いかに聞くかということ。だから、実際にできるだけ逃げ場がないような形、ある程度修羅場を踏まないと、なかなか身につかないと思います。だから、入った頃からお前たちの時代はもう英語だと。英語がしゃべれないとダメだと言われましたけど、なかなか、身につかないですね。ですから、本当に先生自身もやっぱりそういう世の中だと。自分もやっているというような姿勢とか、そういうことをやっている、プラティカルな英語が当たり前でという形に持っていく。5年間で確かに流暢でネイティブに近いものじゃないけれども、ある程度できるぞというところぐらいまでは持っていくという計画を立てられて、実践的な形での教育というものを盛り込まれたらと思います。グローバル化をにらんで、あくまでも英語は手段だということを頭に入れて、カリキュラムができないものかと思いません。

(金重委員)

千葉委員のことに関係するかもしれませんが、高専は15歳から20歳、それから専攻科でさらに2年ということで、1年生、2年生、3年生あるいは5年生ぐらいまでと専攻科の差はすごく感じます。専攻科のレベルは、よく考えたら22歳ですから、大学卒と同じなのですが、専攻科の学生と話をしていると、大学の大学院学生みたいな感じがします。5年間と専攻科2年間、何が違うのかといつも考えるのですが。そうすると、その2年間の専攻科のときはすごく考える時間があるのではないかと。与え

られて、自分で解決なさいと。例えば、1年生、2年生、3年生って、高校生ぐらいですから、受験とかあれば、考えるよりも覚えるほう。覚えるところから考えるこの境目がどこにあるのかということを考えて、例えば問題の発見をするとか、あるいは分析をするとか、あるいは解決する手法を考えるとか、また反省するというPDCAですね。そういうチャンスがすごくたくさんあると、先ほどの動機づけじゃないけども、千葉委員が言われたように実践的な場面を与えられて、問題意識が上がるわけですね。その辺のチャンスをもっと増やしたほうが良いのではないかと。それは何かというと、インターンシップだと思います。インターンシップで、その現場を体験して、世の中にたくさん問題があって、それを自分が体で感じて、これはこういう勉強しないといけないなという、そういう動機づけをつけることのほうが非常に良いのではないかと思います。インターンシップのカリキュラムを見ると、少し短いというか、1週間ぐらいしかない。非常に短い。刺激がない。ただ、受け入れる企業側も、1週間、何とか面倒見れば良いみたいなことで返す。そうではなく、本当に実践的な場面を経験させる機会がもっとあって、もっと勉強する。高専に入った人は非常にレベル高いと思うのですね。意識レベルが。普通の高校に行く学生と。更にそれを伸ばそうと思うと、もう少し早い段階で問題をたくさん感じる機会を与えたらどうかと、そういう感じしますね。高度化というのは何をしたら高度化かわからないけれど、最終的には、良い学生というか、考える力のある学生を輩出することは非常に高度化が求めるもの、先生方の研究もあるかもしれないけども、目的は高等専門学校ですから、専門のレベルの高い問題、それを全部覚えるのじゃなくて、考える。考える学生を輩出する。そのようなことを感じます。意見ですが。是非、インターンシップをもう少し長くやれるようなカリキュラムをつくって欲しいと思います。

(校長)

何人かの先生方からいろいろご意見をいただきました。

千葉委員が言われた外部講師ということについては、これまでもいろいろ行ってますけど、今後とも数を増やすとか、機会あるごとにそういう外部の方の息吹を学生に吹き込むということを今後とも進めていこうと思っております。

外部ということを言いますと、専攻科でのエンジニアリングデザインを意識した演習ですけども、そういうところに企業から課題を出していただいて、その課題を与えて、解決していくというところに現場にはどんなものがあるのかという、そういうようなことを体験すると同時に、それを何とか自分たちで話していく、そういう教育も充実させようと考えております。

英語につきましては、なかなか一足飛びにいかないのですけれど、先ほど言いましたように、専攻科の特別研究の最後の発表を英語でプレゼンするとか、卒論の発表でも英語で概要を、そして英語で話す、そういうことをやれば、また英語の授業に対する身の入れ方、内容もプレゼンのようなことを加味した授業をするとか、いろいろ工夫していきたいと思っています。

実は50周年記念で募金をいただいているのですけれど、計画していることは、国際交流あるいはキャリア教育への支援の資金に充てるということなので、そうしたことへの活用を考えていこうと思っております。専攻科のインターンシップ、これまで交流協定を結んでいるロシア、韓国、中国というような東北地区という、非常に特異なところの大学と交流協定を進めて、そういうところに学生を数は少ないけれど送り出しているのですが、送り出した学生は、皆同じように、向こうの学生のアグレッシブな

面に触発されて、帰ってきての報告会を見れば、皆一様に言うのは、英語をしゃべれるようにならなければいけないとか、それから先方の意気込みに押されている。そのように、一度びっくりさせて、それで、それが起爆剤になって、英語に対する思いとか、その辺が違ってくるだろうと思います。そして、そうしたことを含めての、国際交流を続けていきたいと思います。非常に財政面も逼迫するけれど、できるだけ数を増やしてやりたい。機構のほうも学生ばかりではなく、先生をそういう英語授業ができるだとか、英語に対する感覚を各高専の先生にしっかりと教育していく動きも出てきておりますので、そういうことに参加した先生を中心に、宇部高専の中で環境づくりを行っていきたくて思っております。

(久保田 (隆) 委員)

なかなかマネジメントが大変ではないかと思えます。時代背景が非常に変わってきて、高専を取り巻く環境も非常に変わってきているのではないかという気がします。設立当時と比べてですね。それで、私どもも採用するとき、昔は大卒と同じように高専卒業生を採用していたのですが、これはもう大分前ですけども、技術系の大学卒業がほとんどいなくて、大学院卒なのですね。それで高専の方は基幹職というような形で、高卒の人と同じような形で採用しようと、大分前から変わってきています。それはまた、そのときの就職の状況によるということもあるのですけれども、それが良いのかよく分からないのですが、今のところ、ずっとそういうことでできています。宇部高専のほうも恐らく進学、もちろん宇部高専卒で大学院出て宇部興産に入ってきているのですが、非常に進学する人が増えてきており、従来の5年の高専というところと、両方、両義性があるというか、非常に存在のミッションというのは、さっきから校長がおっしゃっていますが、なかなか難しいところがあるというふうにお伺いしております。

それで、ここにいらっしゃる方、宇部高専にずっと生き残ってほしいと思っておりますけれども、文科省とか、あるいは高専機構といったところの、見通しというか、こういう形でやってほしいとか、どういうものがあるのでしょうか。

(校長)

正式に何かあったかと言われると、私の在職期間中は特にはなくて、ただ、平成15年、16年あたりで、大学と同じように統合再編という動きがあって、高専では、宮城、富山、香川、それから熊本の4地区で2つの高専が一つになって、来年度5年目を迎えます。「高度化再編」という言い方をして、2期目の中期目標期間において4地区での高度化再編がありました。各高専が「高度化を」ということで、3期目に向けて、今のところ高専の定員を減らすという動きはありませんが、地域ごとで定員割れをしている高専もあるし、そのあたりの高専の中で定員の移動みたいなことも起こり得るのではないかと思います。今のところ、宇部高専がどうのこうのということはありませんが、山口県は、宇部と徳山高専、それから大島商専も入れると3高専あるということで、適齢の中卒での数に比べて学生確保できるのか今後課題になってくると思います。

(久保田 (后) 委員)

結局は、この宇部高専の価値をいかに高めていけるかということが、志願者、就職等いろんなことにつながっていくので、こういうテーマの設定をされて、大いに検討し、いい結果につなげていただきたいと思っております。

私どもも企業誘致ですね、今、大変空っぽの産業団地、宇部市は県下一たぐさん持っております、

今、一所懸命、私、先頭に立ってやって、おかげさまで、今、順調に推移していますが、そういう中で、多くの経営者の方とお話して、団地を買ってもらおう上で、全国サービス合戦になっているわけですね。あれを減免しますとか、こういうものを付けますとか。そういうものはもちろん県と一緒に負けないような水準にしているのですが、結局、最後決断していただく上の何ポイントかありますが、人材確保ですね。産業人材がいかにかこの町にあるかということは必ず議論として出てくることです。そのとき、私ももうわかっておりますので、いつも、この高専のこの科のこと、それから就職率が大変よいということ、工学部のこと、工業高校とかですね、きちんと本市の売りとして、いつもPRさせていただいております。この学校案内の5ページ、6ページにもお示しされているように、就職率が良いということで、私どもにとってもありがたいと思っております。したがって、これからも、是非しっかりした教育をしていただきたいと思います。要望として、先ほどの1の1でもお示しされている今後の学科についての見直しという中で、近年の日本における物づくり、取り巻く環境の変化、当然、そこで求められる人材も変わってきているということになりますので、「今、この分野が絶対不足していて、ここを養成してください」と、とても私が言えるような立場ではございませんが、その議論の中で一番大きな分野と言っても良いぐらい人材というものを企業誘致において、また、物づくりを基本とする本市としての非常に大きな要求要素になりますので、そういったところを、私どもも積極的に情報の提供をさせていただきたいと、本日改めて思ったところがございます。以上のことを参考にさせていただいて、今後のこの人材育成の一助にさせていただきたい、そのようにエールを送りつつ、また要望もさせていただきました。

以上でございます。

(議長)

先ほどの中学校の学校訪問ですね、結局、魅力は何なのか。宇部高専の魅力は、もちろん就職率がいい。これは高専全てですけれども、どんなカリキュラムで、どんないい学生を育てることができるのか、そういうことをしっかり、我々もオープンキャンパスのときにそれをして、何とかしようと思っておりますけれども、やはり中学生に向けて、「来て下さいね」というときに、その辺の魅力ですよ、カリキュラムの魅力、そういったこともしっかりお話しすれば、志願者がくるのではないかという気はします。

もう1つ、久保田市長も言われたように、徳山高専もそうでしたけれども、高専は基本的に改組がありませんよね。徳山高専も学科構成は何十年変わっていないと聞いております。宇部高専の場合も各科40名ずつですけれども、志願倍率もでこぼこありますよね。先ほどの大括り入試をやれば、そうしたことはなくなるでしょうし、導入教育、入ってから考えさせるということもあるでしょうし、工学部的に言うと、一番最初にそういうことに手を挙げるといろいろ予算がついてくるとか、そういうふうな考え、多分しますよね。ですから、是非、検討していただきたいと思います。

あと、もう1つ、長崎大学ですか、あそこは工学部、1学科、「工学科」ということになったのですけれども、それで何年か後に話を聞いてみると、需要のバランスがあって、ある学科は非常に希望する学生が減っていると、ある学科は増えていると。そういう市場の動向、市場という言葉が良くないかもしれませんが、そういう形もあるようです。ですから、そういう意味で、大括り化、ある意味なかなか高専は難しいのかもしれませんが、そういう方向をすると、いろいろと良いことがあるのではない

かと、私自身は思います。

(津守委員)

今のお話を聞いて、1つだけ、小中学校への出前授業とか、公開講座がございますけれども、昨年までは他校でその講座を実際に出前授業で聞いて、子供たちは大変関心を持ちました。「水の浄化とロボット」でしたか、2つの講座を違う学年に実施をさせていただきました。そのときに、ちょうど、その学校の出身の学生さんも5、6名、先生方も5、6名ということで、実際に授業を1時間なり、2時間なりやっただきながら触れ合っていたいただきましたし、その大学生と高専生にとってみれば後輩になる子供たちとの触れ合いも実際は授業を通してあったわけです。だから、夏休みに母校訪問もよろしいですけれども、そうした知的好奇心を湧き立てるような中で、高専生が一所懸命頑張っている姿が子供たちの触れ合いの中で伝わってきますし、魅力というか、将来の方向性とか、そうした意味で、そういう実績を増やしていただけることが重要だと。本校も理数教育に中学校としても充実をしていかなければなりませんけれども、そうした実験道具等も全て持ってきていただいていたの講座でしたけれども、大変ありがたかったと思っていますところ。

(小倉教務主事)

どうもありがとうございます。我々のほうからテーマを提示させていただいて、それに応募していただいたのだと思うのですが、なかなかマッチングがうまくいかない場合もございまして、要望に添えない場合もありますけれども、今後とも是非お願いをしたいと思います。

(7) 議長挨拶

何か、ございませんでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、いろいろなご意見ありがとうございました。

予定の時間がまいりましたので、以上をもちまして終了させていただきます。どうもありがとうございました。

(8) 校長謝辞

委員の皆様、本当にありがとうございました。来年度から3期目ということを上申しましたが、50年たって、卒業生の出口が非常に広がってきているということ、それから入ってくる学生の考え方も含めて、非常に多様化してきているということで、本当に今、高専、どういうミッションで行くのか考えどころで、各委員の思われるとおりだと思います。学科のことにつきましても、1学科に編成したところというのは、地元の企業側のニーズだとか、そういうものに合わせて、新しいコースを設けた高専が2つぐらいありますが、宇部高専の場合、本当に私どもが地域のニーズをしっかりと把握するためのアンケート調査等をやっておりません。本校は、割と女性学生が入学し、工学系ではない経営情報学科という特異な学科を持っているというようなこともあり、出口のほうは非常に引っ張りだこの状態ですが、入り口側は非常にそれに合う形で志願者が来ていない。これは少子化によることなのか、あるいは学科の構成に問題があるのかというようなことをはっきりと認識しないまま動いてきているということがありますので、今日いろいろカリキュラムの状況についてご意見いただきましたので、このこ

とを踏まえて、3期目の宇部高専のあり方について考え、また委員の方々から、今後ともご意見いただきたいと思います。本日はありがとうございました。

(9) 閉 会

総務課長の進行により、運営諮問会議が終了した。